

令和5年度 大町西小学校 学校評価 自己評価（総合評価）

本年度も、大町西小学校では全職員一丸となって、「互いの尊厳を守る」学校づくりと、「協働の学び」の授業づくりによる「よりよく生きるために学び続ける子どもの育成」を進めてきました。

総合評価にあたり、はじめに印象に残る児童の姿について紹介します。

6年生の国語の授業の様子です。単元の学習問題「高畑さんの文章は、鳥獣戯画の価値を小6に伝えることができているだろうか」に対して、根拠を明確にして自分の考えを述べる学習をした子どもたちが、その発展として、人生の学習問題「ものの魅力や価値を伝えるために、より大事なものは「何を語るか」「どう語るか」のどっち？」に取り組んでいます。事例をあげながら、正解はどちらかにとらわれ過ぎず、自然体で自分の考えを述べたり、友の意見に共感したりする楽しそうな様子が印象に残っています。



ほんの一コマの姿ではありますが、「協働の学び」に取り組んできた成果が着実に目に見えるものとして現れてきていることを感じさせてくれるものでした。「学び続ける子どもの育成」のために、このような学びの経験をひとつでも多く積み重ねてあげたいと改めて思いました。

以下、本年度の取組の成果と課題を示し、来年度の展望をまとめます。

<成果と課題>

1 対話を基盤とした協働の学びの定着

多くの教室で、「学習問題」、「今日の結び目」、「単元の核心」、「マインドマップ」といった協働の学びのツールが、日常的に位置付くとともに、机を4つに合わせる対話の環境が整ってきました。アンケート結果はもとより、前述のように対話の良さを実感できる児童や教員が増えていきます。昨年度に続き本年度も、ガイドラインに基づきLCで対話を重ねてきたこと、個人研修で各自テーマをもって授業改善に取り組んできたこと、全校研究として村瀬先生にご指導をいただいたこと等、1年間協働の学びに先生方が真摯に向き合い、子どもたちのために研鑽してきた成果です。

今後も対話の質を高めるための「学習問題」について、実際の児童の姿を大切にしながら研修を深め、自ら学習する力へつなげていきます。さらに、児童にとっての学びは教科に留まるものではないので、協働の学びを教育活動全般に広げていきます。

2 自己有用感育成への取組

自分の良さを感じることでできる児童が増え、本校の課題であった不適応を見せる児童についても、少しずつですが減少の方向へ進めることができました。一方で、「困ったことを友だちや先生に相談できる」児童の割合が二学期になり減少してしまったことが気にかかります。「互いに尊厳を守る」「一人ひとりの輝きを認めあう」理念の下、聴く姿勢を大切にされた支援と、対話のできる学級づくりを進めてきたつもりではありますが、さらに子どもたちにとって安心して聴くことのできる環境づくりに力を注いでいきたいと考えています。

全校の中で、協働の学びに抵抗を示したり不適応を見せたりする児童をなくすために、個に寄り添った支援について学び合ったり実践を進めたりするとともに、心を開き対話をすることができる学びの集団づくりに取り組むことで、安心して自分を表現し、明日を楽しみにする学校づくりにつなげていきたいと考えます。

3 探究の学びへの取組

昨年度、探究の学びとして取り組んだ、生活・総合的な学習の時間におけるふるさと（西小・大町）学習は、開校150周年をきっかけにして、各教室で大きく進みました。この学習によってふるさと大町や西小への愛着を深め、自信や誇りを高める児童を育むことが出来ました。

本年度は、中学年を中心に「ふるさとの水」をテーマに、ひと・こと・ものなどに、自ら深くかかわる活動や体験を実現することができました。

今後も、教科横断的な視点に立った生活・総合のカリキュラムづくりを進め、児童一人ひとりにとって探究の学びの場を保障し、自ら課題を持って追究する力を育みます。

<次年度の展望>

1 協働の学びをさらに推進します。本年度より、大町中学校が開校し本校の児童は1つの中学へ進学することになりました。小中連携により9年間の見通しをもち、児童の発達段階に応じた協働の学びの充実をめざします。教師のニーズに沿った研修を進めるとともに、児童へも学び方の理解を図り、めざす学びの姿を共有しながら進めます。

児童にとっての学びは教科に限定されるものではありません。協働の学びを教育活動全般で生かしていきます。

一方で、個別最適な学びについても、一人ひとりの多様性や困り感に寄り添いながら、研修を深めていきたいと考えます。

2 互いを認め、心を開いて主体的に学び合う集団づくりに取り組むとともに、多様な人と関わったり学び合ったりする活動を通して、自己有用感をいっそう高めていきます。

3 総合的な学習の時間の中に、探究の学びの時間を位置づけます。そのために、自ら課題を見つけ、協働の学びによって課題を解決する過程を個々に体験するカリキュラムを検討します。

4 本年度文部科学省より出された375号通知により、特別支援学級と通常学級の役割が改めて明確になりました。特別支援学級では、個別の支援計画に基づき、自立活動や生活単元学習の充実を図ります。また、通常学級にいて教科学習に不安を持つ児童が、安心して学ぶことができる教室づくりを、学びの集団づくりを基盤として、ユニバーサルデザイン化と個別の支援の両面で進めます。通常学級在籍児童であっても、必要な自立活動や教育相談が受けられる体制を整えていきます。

5 低学年では、幼保小の連携を進め、切れ目のない適切な支援を進めます。

6 近年、高学年の教科担任制を試行的に進めてきました。生徒指導面、教科の充実面、業務改善面等で多くのメリットがありましたので、学年の担任の入れ替わりによる教科担任制を実施していきたいと考えます。単級となる学年については、連学年での実施を検討します。

7 ICTは、本年度多くの授業で活用が進みました。教科によって活用方法が違うことはもちろんですが、ICTの恩恵と機器の活用スキルの習得は、どのクラス・児童においても同様に保障される必要があります。「書くこと」に抵抗がある子どもたちにとって、キーボード入力により自分の考えを表現することができるのかの研究も含め、家庭との連携を図りながら、情報モラル教育と一体的に進めます。

学校再編まで残り2年となりました。それぞれの学校のビジョンを大切にしつつも、市内4小学校ならびに大町中学校との連携を密にしながら、令和8年度に良いスタートを切ることができるように、保護者や地域の学習支援ボランティアの皆様と共に子どもたちを支えていきたいと思ひます。

大町西小学校長 井口 博司